

第615回 新潟放送番組審議会 議事録

— 議題 —

テレビ番組
「長岡発 “故郷はひとつ” 子どもたちの未来へ」



平成 28 年 3 月 23 日

BSn新潟放送

第615回新潟放送番組審議会

1. 開催日時 平成28年3月23日（水）午前11：00～

2. 開催場所 ホテルイタリア軒 5F

3. 委員の出席

○委員側出席者(敬称略・順不同)

委員長	相羽利子	副委員長	古賀 豊
委員	正道かほる	委員	小島良子
委員	高井盛雄	委員	佐藤元
委員	佐藤明	委員	細田康
委員	高木言芳	委員	佐々木広介

○放送事業者側出席者

社長	竹石松次	専務	梅津雅之
営業局長	斎藤和利	編成局長	島田好久
報制局長	太田志信	ラジオ本部長	高坂元己

<説明員> 報道制作局情報センター プロデューサー 南加乃子

事務局

事務局長	増山由美子(広報部長)
事務局員	丹羽崇(社長室長)

4. 議題

1 報告事項 4月の新番組・単発番組について(各局長)

2 審議番組 テレビ番組「長岡発 “故郷はひとつ 子どもたちの未来へ”」
(2月27日(土) 10:30～11:25 放送)

5. 議事の概要

各局長からの4月度番組報告に続いて、「長岡発 “故郷はひとつ 子どもたちの未来へ”」について審議が行われた。

～番組審議委員の主な意見・質問～

- とても良くできた番組。今回のプロジェクトについて、プロの指導者が入り、しっかりととしたプロデューサーがつくことでイベントの効果が広がり、色々な層に働きかけている状況をうまくすくいあげた番組だった。また、こうした番組は時として内容が散漫になりがちだが、折々の季節に取材している上に、「故郷はひとつ」という歌のフレーズが適宜、入ることで番組全体の統一感が出ていた。
- まずタイトルにある、ふるさと、子どもたち、未来という言葉に惹かれた。色々な要素を上手に詰め込んだ番組。サウンドロゴ的に故郷はひとつというフレーズが使われていて感心した。最近の児童生徒の気質から考えると、こうした一体感のある取り組みは苦手のように思えたが、一つのものを作り上げていく過程で、表情が変わっていく様子などが良く表現されていた。すべての世代に訴えかけるものがあった。間に挟まる、花火の話題も非常に良かった。プロモーションについて制作過程は紹介されていたが、完成した部分を紹介しきれなかったのが、残念だった。
- 全体を通して、何を伝えたかったのか最後まで分からなかった。番組がテーマについていた3本の柱のうち、花火と音楽の調和は両者のバランスが今一つで臨場感が伝わらなかった。中学生の演奏については当人よりも先生たちの熱意が伝わってきた。全体に散漫な感じがした。最後のプロモーションの部分は、結果が出ないため、意味が良く分からなかった。
- 長岡市民の立場を考えると、良い番組だったと思う。市町村合併を経て長岡市が抱える課題を紹介しながら、子どもたちがそれを乗り越えていく姿は住んでいる人たちにとっては嬉しいと思う。残念だったのは、これまでの経緯を紹介した出だしにもう少しインパクトがあればよかったです。たとえば、宇崎さんの音楽をもっと使う手もあったのではないか。
- 地域おこし・地域創生の取り組みの一つとして、長岡市市民が自らの地域を誇ることができる素晴らしい内容だったと思う。また、「故郷は一つ」も今後、歌い継いでほしい。ただ、花火と合唱、プロモーションのテーマはそれぞれつながりが良く分からず、結果が出なかったこともあるって、全体を通じて中途半端な感じを受けた。小国の子ども達が最後に上手に歌えるようになって、感動した。また、こうした番組の視聴率にも注目すべきだと思う。
- 今回のような文化的な活動にフォーカスが当たるのは良い事だと思う。ただし、一時間の中に収めるには盛り沢山な内容で、少し散漫になってしまったのではないか。また、長岡市内の中でも、紹介された地域に偏りがあったように感じた。
- そもそも長岡夢フェスタとは何かが良く分からず、番組前半が過ぎていった。小国中学校の生徒たちが、デモテープをとる前のあまりやる気を感じられない表情から、変

わっていく姿が印象に残った。小中学生に宇崎竜童さんと関わる体験を企画した長岡市がすごいと思った。正直、子ども達がうらやましいと思った。

- 内容が豊富で、散漫な感じも受けたが、色々な素材を故郷はひとつという歌でまとめた番組制作の意図は感じられた。ドキュメンタリーパン組は人が主役であると思うが、今回の主役は誰なのか、と考えると、子どもではなく、番組を見る限りは宇崎さんが一番目立っていて、長岡市民の印象がやや薄い感じがした。その一方で、よほどの名曲でないと地域で歌い継がれる状況は生まれにくいが、今回、歌の力が弱かったのではないか。
- 音楽によるまちづくりが番組の基本になっていたと思う。合併地域の地図が分かりやすかった。他の地域でも、様々な場面で旧市町村が張りあうケースがあるが、今回は地域の人々の心を一つにしたという行政の狙いをひしひしと感じた。最後に一つの歌を合唱する場面がみられたが、参加した人たちはあの時間を絶対に忘れないし、文化のを感じられて、非常に興味深い番組だった。他の地域でも同様の番組が制作されると良いと思った。

～報道制作局情報センター・南プロデューサーから～

- 長岡市が取り組むミアモーレプロジェクトの進捗状況は毎年、弊社の番組で紹介させて頂き、これで3年目になる。番組はドキュメンタリー的な部分とステージ紹介の部分があり、子ども達の中から主役級を探そうとも思ったが、子ども個人をクローズアップするのは難しかった。反面、500人で7分半演奏した場面では、参加した子供たち全員の顔が映るように配慮もした。今回のテーマで番組を制作することに当初、不安を感じたが、子どもたちの力はすごく、どんどん変わっていくさまを見て、子ども達に未来を託す意義を感じた。長岡市の取り組みを宇崎さんが利益度外視で側面支援している形だが、宇崎さんが直接指導するというよりも、宇崎さんが長岡に入ることで地元の方々が勇気と元気をもらい、またやる気を感じて頑張る姿を取材できた。長岡市が任命したアーティストのレベルも上がっていると感じている。今後も可能であれば長岡市の動きをフォーローしていきたい。

～編成局・島田局長から～

- 土曜日の午前、多くの県民に見て頂いているローカル番組に続けて今回の番組を放送することで、より多くの人たちに見て頂きたいという思いで編成した。今後も、自治体や企業からの要請に基づき、民間放送事業者としてより良い番組を作っていくたい。